

預言者エリヤとその時代

年代	南王国 ユダ	王の信仰	北王国 イスラエル	王の信仰
BC.925	レハブアムが王	主の前に謙遜		
BC.920			ヤロブアムが王	偶像礼拝
BC.913	アビヤムが王に	背教、憐みを受く	ヤロブアム 18年	
BC.902	アサが王と (在任 41年)	主の目にかなった	ヤロブアム 20年	
BC.900	アサ王第 2年		ナダブが王に	
BC.899	アサ王第 3年		バシヤが王に	
BC.886	アサ王第 26年		エラムが王に	主の前に 悪を
BC.885	アサ王第 27年		ジムリが王に	主の前に 悪を
BC.881	アサ王第 31年		オムリが王に	主の前に 悪を
BC.874	アサ王第 38年		アハブが王に	偶像礼拝
			エリヤの働き	



2021年10月24日 説教「幾羽かの鳥が」

列王記第一 17章 1~7節

今朝からしばらく旧約聖書からエリヤの生涯をテーマに学んでいきます。

1. エリヤからアハブ王への預言のことば (1節)

①エリヤ (1)「**ギルアデのティシュベの出のティシュベ人エリヤはアハブに言った。**」裏ページの年表をご参照ください。イエス・キリストの時代から900年ほど前のことです。ダビデ王、ソロモン王の後、王国は南ユダと北イスラエルとに分裂してしまいます。その経緯は列王記第一 11章後に記されています。南王国のレハブアムは信仰的に歩みましたが、北王国のヤロブアムは偶像礼拝に進みました。その後も南王国ユダの王たちは、概ね主を見上げていきました。アサ王は主の目にかなったと記されるほどに41年の在任期間を信仰で歩きました。しかし、北王国イスラエルの王たちは、主の前に悪を行うようになりました。エラム、ジムリ、オムリと、主から離れていました。そして、アハブはバアル信仰に陥り、偶像礼拝は進んだのです。そこに預言者として立たせられたのがエリヤです。その名前は「主こそ神」という意味です。彼はティシュベ(地図北側)の出身でした。預言者エリヤは国王の不信仰を憂えて、王アハブに直言したのです。

②**生きている神 (1)「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。」**政治権力者の耳に痛いことを言う事は、大変勇気のいることであつたでしょう。しかし、それこそが彼の務めでしたから、逃げることなくそこに向かい実際に言葉に出したのです。エリヤがまず伝えたのは、彼が信じ仕えているイスラエル神は、死んだ神ではないということです。つまり、地上において何が起きていても何ものなさらぬ方ではないということです。バアル神を奉じているアハブのあり方を見過ごす方ではないと言いたいのです。「主は生きておられる」と伝えることが、アハブへのエリヤの警告でした。

③**露も雨も (1)「私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。」**そしてさらに伝えた事は、その生きている神からエリヤに与えられた預言でした。「私のことばによらなければ」というのは、エリヤが勝手に判断して語ることばではなく、神から預かったメッセーでした。それこそ、預言者の仕事でした。その具体的な内容は「ここ二、三年間は露も雨も降らないであろう」という深刻な内容でした。言うまでもなく、人間は水なしでは生きていけない存在です。そんな警告を伝える預言者エリヤに対して、アハブ王が良い印象を持つはずがありません。

2. 身を隠せとのお言葉 (2~4節)

①**主のことば (2)「それから、彼に次のような主の言葉があつた。」**そこで、エリヤに危害が加えられる前に、憐み深い主はすべてを見越して、エリヤが取るべき行動を伝えようとされたのです。それは、まさに権

威ある主のお言葉でした。

②ケリテ川のほとり (3) 『**『ここを去って東へ向かい、ヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに身を隠せ。』**』アハブ王ににらまれる存在となった預言者エリヤはまずは身を隠さなければならなかったのです。それは単に逃げるというわけではなく、彼にはまだ大切な仕事があったからです。彼が行くように命ぜられたのはヨルダン川東のケリテ川のほとりでした。地図を見ればわかるように、ケリテ川はヨルダン川の東西をまたいで流れています。その東側の目立たない川のほとりに身を隠せというものでした。

③鳥に命じて (4) 『**『そして、その川の水を飲まなければならない。わたしは鳥に、そこであなたを養うように命じた。』**』そして、肉体の生存に必要な水はケリテ川から得て飲むように指示されます。また、食事としては、主が鳥にエリヤを養うように命じたと言われたのです。イエス・キリストは食べ物のごとで思う煩う者たちに、「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです」(マタイ 6:26) と言われ、養ってくださる主への信頼を教えられました。今、ここで神は鳥に命じて養ってくださるというのです。

3. みケリテ川のほとりでの生活 (5~7 節)

①杯 (5) 『**それで、彼は行って、主のことばのとおりにした。すなわち、彼はヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに住んだ。**』エリヤにとって、主のことばは絶対でした。それが、現実的に厳しいものであっても、はたまた理解しにくいことであっても、それに従うことが彼の信仰でした。つまりは、命ぜられた通りに、彼はヨルダン川の東側に移動して、ケリテ川のほとりに住んだのです。どうなるかは、見当もつきませんし、未知の地での生活を始めたのです。「行け」と言われて、目的地がどこかもわからずに出発したアブラハムのことが思い出されます(創世記 12 章)。

②食糧と水 (6) 『**幾羽かの鳥が、朝になると彼のところにパンと肉を運んで来、また、夕方になるとパンと肉とを運んで来た。彼はその川から水を飲んだ。**』主は真実な方です。お言葉通り、鳥を用いて、エリヤを養って下さいました。朝夕に、幾羽かの鳥がパンと肉を運んで来てくれて、エリヤは養われるようになったのです。また、ケリテ川からは水を得ることができました。少なくとも、その時点では川に水は流れていたのですから。

③その川も枯れ (7) 『**しかし、しばらくすると、その川がかれた。その地方に雨が降らなかったからである。**』しかし、残念なことにケリテ川の水もほどなく枯れました。その地方においても、雨は降らなくなっていたのです。それは、神がエリヤに告げられた通りでした。エリヤのいる場所だけに、水が豊富にあるというわけではありませんでし

た。エリヤの生活場所であるケリテ川も枯れ、水はなくなり、生活に困窮することになったのです。「行け」と言われて、やって来たにもかかわらず、試練はすぐにやってきたということになります。

《結論》 7 月の静思の時カレンダーで第一列王記となった時に、「難しいです」という声がありました。確かに、いきなり 15 章から読み始めると前後関係もわかりにくく、馴染みのない人の名前なども出て来て、記事の中に入っていきにくかったことと思います。実際的には、その月の聖書箇所今朝から学ぶ預言者エリヤのことが記されていたので、読み続けていけば内容的には、理解しやすくなったことと思います。

今回、エリヤの生涯について学ぶように導かれたのは、旧約聖書には多くの信仰の人々が出てきますが、預言者エリヤのことは格別に覚えておかなければならないと考えたからです。イエス・キリストが山上変貌の出来事にあつた時に、ペテロとヤコブとヨハネはモーセとエリヤが現れてイエスと話し合っているのを見た、とあります(マタイ 17:3)。また、バプテスマのヨハネが「私はキリストではない」と言明し時に、ユダヤ人たちは「では、いったい誰ですか。あなたはエリヤですか」と聞いています(ヨハネ 1:21)。エリヤは新約時代にあつても、引き合いに出される人物であつたのです。それゆえに、聖書を読む人々は、どうしてもこの人の生涯を知っておかなければならないのです。

さて、預言者というのは、神から御言葉を預かって人々に語り告げる人です。預言の中には将来のことを予言する内容もありますが、それだけではありません。その時代の罪を明らかにし、悔い改めを促す説教者でもあつたので

す。今朝の聖書記事の中には、その二つがあらわれているのです。すなわち、アハブ王に対しては、真の神に対する背教を指摘していますし、近い将来に雨が二、三年も降らなくなるという予言もしています。エリヤは権威に溢れて、預言者の務めを行っているのです。

しかし、そのために彼はまずは神の命令に従って、ケリテ川のほとりに逃れなければなりません。彼がしばらくの間、預言者として働くためにはどうしても必要なことでありました。だからと言って、それが楽な環境であったわけではありません。いわば住居のない生活で、目の前の水や食料といった生存に必要なものすら、保証されていたわけではありません。ただ、「川の水を飲みなさい。鳥にはあなたを養うように命じてある。」という主の約束をいただいただけでした。エリヤはそれを信じました。そして確かに、鳥は毎朝夕にやって来てパンと肉を運んでくれ、川から水も得られました。

私たちの人生にも、あるいは今日の食にも事欠くということがあるかもしれません。食は与えられても職はないということもありましょう。また、食も職もあるが、将来が見えずに将来が心配だという場合もありましょう。また不安や恐れに囲まれているという人もあるでしょう。主イエスは言われます。「何を食べるか、何を飲むか、何を着るかなどと心配するな。まず神の国とその義を求めよ。そうすれば、必要はすべて与えられる。明日ための心配は無用だ。」(マタイ 6:31~34 抜粋)。エリヤはイエス・キリストが教えられた御言葉を実践してくれていました。私たちの人生には悩みがつきものです。しかし、思い煩うより前に、主を見上げていくことです。エリヤの場合には鳥が用いられまし

たが、あなたの場合は、何が用いられるのでしょうか。主を第一にして祈っていきましょう。